



Title	ラテンアメリカ地域研究における現代詩 : バジェホ、パラ、スリータ (1)
Author(s)	松本, 健二
Citation	Estudios Hispánicos. 2022, 46, p. 71-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(研究ノート)

ラテンアメリカ地域研究における現代詩

——バジェホ、パラ、スリータ (1) ——

松 本 健 二

1. はじめに

文学テキストのなかでも特に読み手の主観に強く依存した審美的基準で受容・評価される機会の多い詩というジャンルは、ラテンアメリカの現実社会が抱える諸課題に対するアプローチである地域研究¹の対象になり得るだろうか。もちろん、詩から読み取ることのできる地域特有の歴史的背景、書き手の思想的遍歴や地域の現実に対する批判的視座の有無等、現代詩の研究から地域研究の枠組みに寄与する手がかりはいくらでも思い浮かぶ。いっぽう、文学研究において対象となる詩テキストの大半が専門研究や翻訳等を介した国際的認知の蓄積によって半ば公的に登録されたキャンノンであり、いわゆる世界文学のカテゴリーに含まれる以上、その受容と研究はテキストの書き手や第一受容者が属する地域の特殊性、ローカルなコンテクストをとときには離れ、より汎用性のある解釈を求めて、いわば純・文学的アプローチとでも呼ぶべき性格の場へ移行する機会も増えてこよう²。そもそも対象テキストと先行研究のみでも場合によっては充足し得る外国語文学研究は、物流の進化と活字媒体の急速な電子化のおかげで遠隔地からの資料入手が著しく容易になった反面、疫病や政情不安や各種災害等によってラテンアメリカ一部地域への移動がますます困難になっているようにも思える現在、当該地域の特殊性に関する議論は地域在住の研究者に一任する前提のもと、ラテンアメ

1 京都大学地域研究統合情報センター共同研究プロジェクト・地域研究方法論研究会 サイト (<http://yama.cseas.kyoto-u.ac.jp/areastudies/astudies.html>; 2021年12月31日閲覧)。

2 文学テキストをそれが生まれたローカルコンテクストから最終的に引き離したうえで淘汰し古典化する市場メカニズムと読者であるともいえる (モレッティ 2016: 91-127 「文学の屠場」参照)。

リカ各国で生産された個別テキストにより普遍的な文学性を追求するタイプの研究にますますシフトしていくことになるのだろうか。

この問いはとりあえず否定せざるをえない。言うまでもなく、いったん世に放たれた文学テキストは、次元の異なる様々な受容と解釈の地平に対して不可逆的に開かれる。准古典化し、翻訳を介して世界各地で共有されるようになったキャンノンの作品といえども、それが生成された地域では独自の受容の過程を介して他地域では見られない意味づけがなされている可能性もある。詩とはアブリオリに価値を内在させているのではなく、受容の過程で様々な角度から無数の評価が介入し、時間をかけてその価値が自然形成されてゆく〈生きたテキスト〉である。ラテンアメリカ特有の社会的現実に根差したうえで文学作品として世界水準に達しているか、ごく単純に言い換えると「ローカルコンテツ（＝固有の現実）をグローバルマシン（最新の文学技術）でいかに巧みに加工したか」といった、ラテンアメリカの小説に関してしばしば持ち出される単純かつ短期的射程に基づく指標では推し量りにくいテキストであるともいえよう。20世紀以降のキャンノン化した、あるいはしつつあるラテンアメリカ現代詩は、その生成と受容の過程において、グローバルコンテクストで議論できる意味づけと、ローカルコンテクストで議論できる意味づけの双方が複雑に絡み合うなかで、受容主体の地域や時代に応じてその文化的な価値が常に変動し、その意味の場は時には拡大し、時には縮小してきた。

ここではラテンアメリカ現代詩について代表的な三人を取り上げ、グローバルコンテクストとローカルコンテクストがいかに関係しあって意味の場が形成されているかを、研究動向や鍵となる詩集の紹介という形で大局的に検討する。具体的には1) グローバルコンテクストとローカルコンテクストに基づく受容の幸福な共存例（バジェホ）、2) ローカルコンテクストを取り込んだ言説が立ち遅れている例（パラ）、3) 詩人自身が意図的にグローバルな文脈と距離をとり、あえて特定のローカルコンテクストにシフトしている例（スリータ）として分類することにする。

2. バジェホ

セサル・バジェホ（César Vallejo, 1892-1938）が今日ペルーのいわゆる国民的詩人となっていることには疑いの余地がない。モデルニスモの強い影響

下にありながら、アンデス出身者特有の想像力をいかに駆使し、時間を遡及して戻ることのできない家（hogar）という強固な詩的トポスを形成することに成功した第一詩集『黒衣の使者ども』（1919）。性、都市に生きる不条理、隔離幽閉下の孤独等の普遍的テーマを、新語を駆使し、指示対象の固定を徹底して避けるという当時のペルーとしては極めて前衛的な手法で表現した第二詩集『トリルセ』（1922）。スペイン内戦をテーマにマルクス主義的思想に基づきつつも宗教的救済を希求する『スペインよ、この杯を我から遠ざけよ』（1939）。ヨーロッパで書き溜められた人類共通の実存的欠如というテーマが際立つ『人の詩』（1939）。これらバジェホの主要四詩集には、いずれも世界文学のキャンノンと認定するのに非常に便利でヴァリエティ豊かな指標を見て取ることができる。

しかし、生前は最初の二冊の詩集を刊行したのみで、1923年に出国して以降、二度とペルーに戻らなかったバジェホの詩がペルー国内外でキャンノンと認知されるまでには、意外と長い時間を要している。1920年代にホセ・カルロス・マリアテギが『ペルー現実解釈のための七詩論』における文学の章（Mariátegui 1928）でバジェホを論じたのはアンデス表象の先駆的作品という位置づけであったが、この段階では他の多くのペルー詩人のなかのひとりにすぎず、文学に特に造詣の深かったマリアテギの先見の明で拾われたというに過ぎない。1930年代、特に没後からスペイン語詩の各種アンソロジーに掲載されるようになるも、それは今日も続々とラテンアメリカ各国で刊行され続けている同時代詩のアンソロジーにおける無名詩人と同じ扱いに留まっている。世界規模でバジェホの評価が進んでいくのは1957年から60年にかけての数年間であるとみなしていいだろう。この時期に前後してバジェホの研究史における三つの記念碑的研究、すなわちペルーの詩人ハビエル・アブリルの著書（Abril 1958）、1948年から約十年にわたってラテンアメリカ各地の大学で研究と指導に従事していたフランス人文学者アンドレ・コイナーの著書（Coyné 1957）、さらに、スペイン時代のバジェホと親交があり、メキシコに亡命後はスペイン語前衛詩全般を紹介し続けたスペインの詩人ファン・ラレアの著書（Larrea 1958）、さらには非スペイン語圏からもしち早くイタリアのジョバンニ・M・シリオの著書（M. Zilio 2002：オリジナル版は1960）等が続々と刊行されているからである。コイナーもラレアもシュルレアリスムをいわば現場で体験した世代で、アブリルもセサル・モロと並ぶペルー・シュルレアリスムの代表的詩人であり、これら三つの著書

はバジェホの作品をヨーロッパ前衛詩の亜種としてとらえる傾向にあり、また、この段階では明らかにされていなかったペルー時代の伝記的情報ではなく、渡欧後、とりわけスペイン内戦時代のバジェホの政治的活動の意味を重視し、その共産主義革命に対するシンパシーを無批判かつ同情的に記述している点が共通する。M・シリオの著書は『トリルセ』等の詩を記号論的アプローチで普遍的なテーマに分類する試みであり、ペルー的な文脈に固執していないという特徴を持つ。さらに1959年にはラレアが在籍していたアルゼンチンのコルドバ大学で上記四名を含む文学者を集めた国際シンポが行なわれ、その後も断続的に開催されたこのイベントの成果は1961年から74年にかけて計13部の学術誌『アウラ・バジェホ』となって結実する。また、この間、1969年にはリマでモンクロア版全集が刊行され学術研究を行なう共通の基盤が実質完成した。

1960年代にバジェホの詩の解釈をめぐって重要な指摘を数多く提供した著者は、上述したようにどちらかと言えばヨーロッパ文学、特にシュルレアリスム等の各種前衛文学を参照項としてその比較に基づいた評価をする傾向が強い。これに対してペルー側の文学者は主として伝記的情報の調査に基づいたむしろ恣意的な記述に特化する傾向にあり、その代表がルイス・モンギオ (Monguió 1960) やフアン・エスペホ・アストゥリサガ (Espejo Asturri-zaga 1965) である。詩の解釈について、前者はペルー特有のコンテクストを軽視とまではいかずとも黙殺し、先行言説との照応関係やラテンアメリカ地域外のグローバルな文学作品、とりわけマラルメからシュルレアリスムへと至る同時代フランス語詩との比較検討を重視する傾向にある。後者は作者の伝記情報をはじめとするペルー特有のコンテクストに強くこだわり、それのみに基づいて先行言説で唱えられた解釈に依らず自由な読みを展開する傾向が強い。この傾向は今なお顕著で、バジェホというひとつの詩テキストをめぐるある種の領有問題が発生しているような印象すら受けることもある。言うまでもなく、その国の〈国文学〉として一定の公共性を帯びようになった詩のテキストは、国籍を超えたアカデミズムの言説世界とは別の次元で、たとえば大学のような教育現場から政治的言論に至る様々なコンテクストで読まれ、ときには意味を根底から換えられ、また読み手の意図によって違う物語を新たに与えられてゆくことになる。

バジェホの詩作品のなかでその解釈の幅が最も広いのは『トリルセ』であろう。極めてペルー的な表象に満ちていながら、同時に地域的な記号に限定

されることのないその自由な作風から、これまでに過剰ともいえるほどの解釈記述が世界中で行なわれてきた。その経緯はいわゆる脱糞の詩として知られる「I」をめぐる松本（2012）が述べているとおりだが、ここでは近年新たに生まれてきたペルーのローカルコンテキストに基づく新解釈を紹介しておくこととする。

トリルセ「V」は、先行言説を敢えて一般化して抽出するなら、植物のイメージに託して性愛行為を詠んだ詩であると考えられる。とりわけ第三節をめぐる数字の象徴するものを中心に数多くの抽象的な解釈が提起されてきた。

La creada voz rebélase y no quiere
ser malla, ni amor.
Los novios sean novios en eternidad.
Pues no deis 1, que resonará al infinito.
Y no deis 0, que callará tanto,
hasta despertar y poner de pie al 1. (Vallejo 1991 : 59)

『トリルセ』の受容史では1975年に刊行された米国人文学者ニール・シルバによる大著『トリルセ的段階におけるセサル・バジェホ』（Neale Silva 1958）が最初にして最も詳細な解釈記述として知られ、ペルーのマルコ・マルトスとエルサ・ビジェヌエバによる新語注釈付きの著書『トリルセの言葉』（Martos, Villanueva 1989）がペルー的なコンテキストを重視した解釈でその対極に位置づけられ、そして、すべての主要な先行研究の交通整理をしているのがカテドラ版の『トリルセ』（Vallejo 1991）で詩一作ごとに受容史を整理記述した（米国に拠点を置いていたペルー人というのがいかにも示唆的である）フリオ・オルテガであり、基本的にこの三冊を押さえておけば『トリルセ』の主要な解釈を俯瞰することができる。ニール・シルバは最初にこの詩を「セックスの詩（Coyné 1958 : 90）」としたコイネーの議論をさらに発展させる形で、それ以上に「哲学的とは言わずとも思索的な詩（Neale Silva 1975 : 526）」だと述べたうえでまさにその思索的内実を詳細に記述している。これに対してマルトスらは数字の1と0をそれぞれ「男性の図像、女性の図像」、すなわち性器のイメージが投影されたものと単純に記述し、二人の人間による性交渉の力学のみを読み取っている。そのうえで、

オルテガ (Vallejo 1991 : 59-62) のようにこれら有力な解釈の全体を総合的に記述してゆくというのが、現在のバジェホ研究における主流と言って差し支えないだろう。

近年では、バジェホの詩全体を貫くテーマを実存的な欠如 (carencia) としたうえで高度に観念的な読解を試みているフランスのアラン・シカールがこの詩を取り上げ、1 や 0 等の数詞は詩的主体にとっての完全性 (plenitud) を意味する母のような基盤を失った、いわば数として増殖するばかりで意味を持たぬ断片の表象であると述べている (Sicard 2015 : 68-69)。いっぽう英国のステファン・M・ハートは現地調査に基づく詳細な評伝『セサル・バジェホー文学的評伝』において『トリルセ』の多くの詩にインスピレーションを与えたと言われる女性の周辺情報を提供し、性を扱った詩に非常に難解な表現が多用されているのは前衛的手法の影響によるものではなく、単に扱われているテーマが 1920 年代のペルーにおいてタブー視されていた領域であったこと、そしてそれ以上に、具体的にどの人物とのどのような行為に言及しているのかを明示するのを避けたに過ぎない、バジェホが当時置かれていた環境との関係で説明できると指摘する (Hart 2014 : 136)。

私見であるが、ペルーの国民的詩人であるバジェホの詩もペルー人にそう読まれているとは思えないことがある。そのなかでも誰もが覚えていると言えるのは初期の二詩集のなかのいくつかの詩に限られ、上述した『トリルセ』の「V」はそれに該当しないものと思われる。要するにバジェホの詩の大半は、一般読者に読まれることを通じてではなく、むしろ 1950 年代以降にアカデミズムの解釈研究の蓄積のなかで徐々にその評価、すなわち「読まれ方」を固めてきたと言っても過言ではない。いわゆる世界文学としてのキャンノン化を目標とするペルー国外の研究者は、たとえば第一次大戦の惨禍やスペイン風邪の流行やロシア革命等ヨーロッパの時代情勢、さらにはダダイズムやシュルレアリスムやドイツ表現主義等の同時代文芸思潮という、いわばグローバルコンテクストを念頭に置いた解釈記述に特化する傾向があったいっぽう、ペルー国内の研究者も伝記的情報を提供する役割に甘んじることばく、20 世紀初頭のペルー、特にトルヒージョやリマといった都市部特有のローカルなイメージに絡めて『トリルセ』の詩等を解釈記述する傾向にあったわけだが、結局この二つの読みのスタイルが合流する形で〈ペルーの詩人〉バジェホ像が形成されているのはある意味で幸運であったと言える。近年は上述したハートのようにペルー国外の研究者が改めてローカ

ルコンテキストに解釈を引き戻して新たな議論を提示することも多く、アルゼンチンのエンリケ・フォファニーによる著書『バジェホと金－詩における主観の様式』は、たとえば『トリルセ』の詩「XXIII」に見られるような都市部とアンデスのイメージを対置させる詩に現れる「世界の賃貸料（el alquiler del mundo）」といった経済用語に着目し、ペルーとヨーロッパの様々な都市の情景を言葉にしたバジェホのイマジネーションのもつ時代性と地域性を改めて浮き彫りにしている（Foffani 2018）。

以上のように、バジェホ研究に関しては今後もペルー独自のローカルコンテキスト、受容と解釈の過程も含めた広義のアンデス表象や国民国家のセルフイメージ形成といった領域での論考が出てくる可能性があると考えられ、そうした言説は日本においてもラテンアメリカ地域研究の枠組みで議論し得る対象となる可能性が高い。

（未了）

参考文献

- Abril, Javier, 1958. *Vallejo (Ensayo de aproximación crítica)*. Editorial Front.
- Coyné, André, 1957. *César Vallejo y su obra poética*. Ediciones Letras Peruanas.
- Espejo Asturrizaga, Juan, 1965. *César Vallejo. Itinerario del hombre*. Juan Mejía Baca.
- Foffani, Enrique, 2018. *Vallejo y el dinero. Formas de la subjetividad en la poesía*. Editorial Archivo Vallejo.
- Hart, Stephen M., 2014. *César Vallejo. Una biografía literaria*. Editorial Archivo Vallejo.
- Larrea, Juan, 1958. *César Vallejo o Hispanoamérica en la Cruz de su Razón*. Universidad Nacional de Córdoba.
- Marcos, Marco, y Villanueva, Elsa, 1989. *Las palabras de Trilce*. Seglusa, Universidad Nacional de San Marcos.
- Mariátegui, José Carlos, 1928. *7 ensayos de la interpretación de la realidad peruana*. Editorial Amauta.
- 松本健二、2012. 「糞のアマルガム－セサル・バジェホ「トリルセⅠ」に関する考察」『大阪大学世界言語研究センター論集』7号、pp.15-34.
- Monguió, Luis, 1960. *César Vallejo (1892-1938). Vida y obra, bibliografía, antología*. Ediciones Perú Nuevo.
- モレッティ、F. 2016. 『遠読〈世界文学システム〉への挑戦』秋草俊一郎・今井亮一・落合一樹・高橋知之訳、みすず書房

- M. Zilio, Giovanni, 2002. *Estilo y poesía en César Vallejo*. Editorial Universitaria.
- Neale Silva, Eduardo, 1975. *César Vallejo en su fase trileica*. University of Wisconsin.
- Sicard, Alan, 2015. *César Vallejo, el poeta de la carencia*. Editorial Archivo Vallejo.
- Vallejo, César, 1991. *Trilce*. Cátedra.